

地域の活性化と学生ボランティアの活動 —大麻市民夏祭りの活動を通して—

Activation of a Region Through Activities by Student Volunteers at The Oasa Citizens' Summer Festival

村 井 俊 博 塩 田 英 樹
Toshihiro MURAI Hideki SHIOTA

抄 録

今日の地域社会は、都市化や情報化等の変動がめまぐるしく、中でも人口の過疎化・過密化は、多くの地域格差を引き起こし、大きな課題となっている。

また、「高齢化」が進むことによって、地域の活力が失われたり停滞を引き起こすなど高齢化が故に様々な状況を呈している今日、こうした地域課題への対応に種々の施策や方策が検討されてはいるが、簡単には解決出来ない問題が多いのが現実である。

ここでは、そうした地域課題に対し、より具体的な対応として「学生ボランティア」の活動による方法で、地域の祭りへ取り組んだ実践事例を通して、地域課題を考察して行こうとするものである。

その活動も、単なる「手伝い」や「補助」といった従来の形ではなく、むしろ活動を通して相互に学びあい、一般の人たちと学生が一緒になって「祭り」をつくり、「地域づくり」をしようとする「生涯学習」の方向への提言でもある。

また、こうした形で行事を通して世代間交流がなされ、文化が引き継がれていくなれば、それは最も自然な流れの中で「地域」をつくって行くことにつながるものと考えられる。

I は じ め に

日本人の平均寿命は年々伸び、現在は男性は77.64歳、女性が84.62歳（平成12年現在）といわれている。また、北海道江別市の65歳以上の人口は15.4%（平成13年7月31日現在）であるが、今回取り上げる江別市大麻地区（人口約3万人）においては、同じく65歳以上の人口は17.91%と「超高齢化」してきている。

特にこの大麻地区の「高齢化」が進んでいる背景には、この地区が市内で札幌市へ最も近く、札幌市のベットタウンという傾向が強くにじみ出ているからであろう。都市整備公団等によって昭和30年代後半から40年代にかけて作られた団地が、そのまま年を経ることによって住民の年齢が自然に上昇したのである。

この地域が開発された当時、子供たちが小さかった頃の大麻は活気に満ちた素晴らしい地域

であったろうと想像される。しかし、その子供たちも成長し、やがて就職や結婚などでこの町を去り、老夫婦が残ったという家庭が多くなったということであろう。

Ⅱ 地域行事と学生ボランティア

このように「高齢化」が進んでいる町での地域行事の内容をより充実させ、より高まりを期待するならば、そこには当然「若い力」が求められる。その一つの方法として「学生ボランティア」が取り上げられてきた。

地域の「若い力」としてはその地域に住む一般勤労者としての「若者」が対象と考えられるが、今日ではそうした一般の若者が地域諸行事の中心として参加させるという点では、その組織的な面からも、若干無理な点が見られるようである。しかし、江別市内の大麻地区は本学並びに札幌学院大学の所在地であり、更に隣接の野幌地区には酪農学園大学、江別地区には北海道情報大学と4つの大学が続いる「学生の町」でもある。したがって高齢者の多いのと同じく、学生も多く在住しているという特色がある。

こうしたことからこの地域に在住する大学生による「ボランティア」としての力が期待されて来た。従来もこの「大麻市民夏祭り」をはじめ「大麻銀座商店街夏祭り」「中町ときめき祭り」、秋の「健康まつり」や冬の「雪んこ祭り」等、いろいろな祭りに「学生ボランティア」の姿が多くみられたように、この町は「学生抜きでは……」というよりは「学生が入っているのが当然……」というような雰囲気があったからだと思われる。

また、学生にとっても、身近にあって「地域についての社会的体験が可能」という面では、貴重な体験の「機会」や「場」が提供されることになるのであり、「地域」もまた若い力を得るという、相互にメリットのあることが地域と「学生ボランティア」の関係に大きな意味を持つものと考えられるのである。

Ⅲ 生涯学習とボランティア

本学の「生涯学習システム学部設立のねらい」に「北海道をはじめ各地の過疎化現象の特殊性を踏まえ《活力ある元気なふるさとづくり》を推進できる生涯学習に関する総合能力を身につける人材を育成する。」とあげられている。また「生涯学習を支援するための生涯学習事業や活動、ふるさとづくりを推進できる『企画・立案・組織・運営・管理・評価』の総合力を身につけた……」とあるように、本学部は、あくまでもそうした生涯学習の支援者の育成を主たるねらいとしている。

平成10年4月から「小学校及び中学校の教諭の普通免許状に関わる教職員免許法特例に関する法律」により、教員免許状を取得しようとする学生に対しては一週間の福祉施設や養護学校への「ボランティア活動」が義務付けられた。このような「ボランティア活動」の体験が人間としての大きな、より確かな教育効果のあることを認めたものであると考える。

こうした法律に基づいた一週間の「ボランティア活動」と同じく、数ヶ月にわたり企画・立案・実施・評価と、地域の人たちと一体となって活動している「ふるさとづくり・祭り」の

「ボランティア活動」も、同じ扱いとなるよう期待しているところである。

Ⅳ 「大麻市民夏祭り」学生ボランティア活動推進の経過と課題

平成13年度「大麻市民夏祭り実行委員会」から「学生ボランティア」の要請を受け、その準備から当日終了時までの経過を概観し、推進状況を具体的にたどって見たい。

1. 「学生ボランティア」の組織化

(1) 実行委員会からの委嘱と学生ボランティアの募集

この「大麻市民夏祭り」の実行委員会から、正式に祭りの「学生ボランティア」として要請があったのは、祭りの約1ヶ月前の6月18日(月)のことであった。

当初「どのような係」があって「何人必要か?」ということについてはよくわからなかった。しかし「ボランティアは必要である」ということが理解できたので、とにかく「学生」を集めることが必要と考えて、本学は勿論、近隣の札幌学院大学等へも「学生ボランティア」として協力してくれる学生を募集した。

写真1 「大麻市民夏祭り」の1コマ



そして、学内では、早速関係者間で協議し次に示す要領をもって「地域行事研究サークル」を組織し、その会員の活動として「大麻市民夏祭り学生ボランティア」を募集しはじめた。

北海道浅井学園大学地域行事研究サークル（地行研）

平成13年6月21日

- 1 名称 この会は「北海道浅井学園大学地域行事研究サークル」という。
- 2 ねらい
生涯学習を進める一環として、地域行事のありかたについて研究を深めあわせて世代間交流と、地域の活性化を図る中から、生涯学習支援者としての力を育てることをねらいとする。
- 3 目的
(1)地域行事の実態を調査・分析をする。
(2)地域行事の望ましいあり方を研究する。
(3)地域行事にボランティアとして活動をする。
- 4 会員 北海道浅井学園大学に在籍する学生
- 5 研究計画（平成13年度）
(1)大麻市民夏祭りの運営・協力
(2)江別市のよさこいソーランの団体活動の調査・研究
(3)江別市の地域行事の調査（季節・形態・区分）
- 6 協力・連携
(1)大麻市民夏祭り実行委員会
(2)江別市・江別市教育委員会 等

(2)学生ボランティアの役割と人数

以下、実行委員会の全体会議の経過を概観し「学生ボランティア」の計画や作業の取り組みの状況をまとめた。（関係分のみ）

第5回実行委員会 7月4日(水) 東町住区センター 18:30～

（学生ボランティアの関係分）

学生ボランティアの出番・種目の確認

実行委員の各担当者の確認（学生をリードする各実行委員）

全体の推進日程の確認と準備事項の具体的内容の確認

学生募集をして、人数があつまっても、何をどのように進めるかという役割と人数がはっきりしないと、ボランティアの活動計画を立てることができない。そこで実行委員会の中では、そのことを中心に検討した。

この実行委員会では、半月間にわたる募集状況を説明した。そして「どの係りに、何人の学生ボランティアが必要か」という調査をおこなった。しかし、おおよそ何人という数は提出されたものの、どの係りがどのような仕事をするのかはなかなか明らかにならず、学生も「ボランティアとして、何をするのか」という戸惑いがあった。

(3)学生ボランティアの役割分担の明確化

第6回実行委員会 7月11日(水) 宮町会館 18:00～

学生ボランティア役割分担提案～学生69名。

- ①会場設営関係42名（ゴミ15・警備10・駐車場15・宿直2）
- ②スポーツ 8名 ③ステージ12名（司会2・ステージ6・コンテスト2・補助2）
- ④事業部7名（出店関係補助）

前回の実行委員会での調査をもとに、係りと必要人数の案を示し、学生ボランティアの「夏祭り」当日の役割の概要を提示した。

これでおおよその形が見えてきたが、仕事をどのように進めるか、それぞれの細かな内容まではわからなかった。

(4)実行委員会役員と学生ボランティアの打合せ会（学習会）

実行委員会役員と学生ボランティア役員の打合せ

7月13日(金) 於：北海道浅井学園大学パル5F 17:30～19:30

実行委員 岸本 矢萩 石田 藪（4委員）

学生代表 山川 上野 長谷川 足立（4人）

内 容 会場作成・運営・警備や駐車場関係について検討

この学生ボランティアの活動が十分にその目的を達成するためには、更に細かな仕事の内容を理解しなければならず、そのための担当の役員との打合せ会を行った。

(5)実行委員会と学生ボランティアとの対面

第7回実行委員会（含学生ボランティア）

7月17日 於：元町自治会館 18:00～

- ① 学生自己紹介
- ② 学生ボランティア話し合い・総務委員の決定。
学生ボランティア代表 大貫真理（札幌学院大）
同総務委員 ・山川元喜 上野順一 長谷川太樹 他2名（北海道浅井学園大）
・梅沢直生 伊藤ひろみ 他2名（札幌学院大）

第7回実行委員会では、実行委員と「学生ボランティア」が合同で会議を行い、相互の交流と理解を図った。

そして、今回は学生のこれからの取り組みについて、話し合ったことに意義があった。

(6)実行委員会事業部と学生ボランティア打合せ（部会）

実行委員会事業部と学生ボランティア打合せ 於：元町会館 7月20日 18：00～

学生出席 大貫 上野 ほか

実行委員 岸本 矢萩 石田

学生ボランティア仕事分担と必要人数確定し、作業の細微を打ち合わせる。

具体的な話し合いが深まった、意義のある打合せだった。この打ち合わせを通して、実行委員と学生役員とが次第に密接な連携が出来るようになり、その後の作業がスムーズに進んだ。

(7)実行委員と学生ボランティア合同会議

第8回実行委員会（含学生ボランティア）

7月24日(火) 元町自治会館 18：00～

① 学生ボランティアの取り組みと現状～（学生計画案）村井提言

② 学生ボランティアから実行委員会へ要望（ゴミ処理・仕事の指示の仕方）

さらに具体的な内容の計画書を作成し提案した。内容について更に検討し深める。

(8)実行委員と学生ボランティア合同会議（最終回）

第9回実行委員会（含学生ボランティア）

7月28日(土) 元町自治会館 18：00～

プログラム 会場配置図等決定版を受け取る。

学生ボランティアが担当する内容についても一層具体的に検討され、確認された。

(9)学生ボランティア代表者会議

学生ボランティア代表者会議	会議内容
期日 平成13年7月30日(月)	1 大麻市民夏祭り全日程説明
会場 札幌学院大学 第一談話室	2 仕事内容と分担
参集 各大学学生ボランティア役員	3 当日の日程動き
進行 大貫麻理	4 各係りごとの詳細確認
記録 小松寛子	5 その他

更に、学生同士が役割の確認と、進め方の具体的な最終打ち合わせを行うために、代表者会議を行った。また、この会議をとおして、学生の一致団結が図られたのであった。この中で「学生ボランティア」拡大の為に人員確保活動と細部打合せ会も併せて行い、これまで的人数では「数」が不足している為、更に学生間で人員確保（メンバー再募集）をかけて、約72名の学生ボランティア数に伸ばした。

○「学生ボランティア」のメンバーの確定（平成13年7月30日現在）

- ・北海道浅井学園大学 29名 ・札幌学院大学 34名
- ・大麻高校生 9名

2. 「大麻市民夏祭り」当日の活動状況

2-1. 「大麻市民夏祭り」第1日目 8月4日(土)

(1)全体作業～祭り会場作成（9：00～12：00）

学生ボランティア全員は、晴天に恵まれたこの日、実行委員と共に朝9時に「祭り」会場へ集合した。実行委員長の挨拶を受けた後、メンバー全員で「メイン会場」の作成にあたった。主な作業を上げていくと次のようなものである。

- ① 本部を始め、救護用などのテント設営と机や椅子などの搬入と設置。
- ② 分別処理ゴミ箱（燃やせる・燃やせない・トレイ・ピン・カン・ペットボトル）を作成し6ヶ所に設置。
- ③ 会場全体で必要な物品搬入や移動等、多数人数の必要なものへの対応。
- ④ その他 部分的に必要な作業への対応等

(2)各係り作業～所定の場所にて（13：00～21：00）

- ① 会場整理（ゴミ箱のそばでゴミの指導及び処理）6箇所～各4人で担当。
- ② 駐車場整理（車の出入りの指示や安全確認）7箇所～各3人で担当。
- ③ ステージ補佐（ステージの準備・整理等）4人で全種目担当。
- ④ 事業部（販売補助8名）
- ⑤ 介護要員は病院スタッフで十分対応されたので、予定者はゴミ係りへ回った。
- ⑥ その他緊急必要に応じての対応もあった。

長時間の作業となるために、ゴミだけはローテーションを組み、90分ごとの交替で時間の長さに対応していた。

しかし、駐車場の担当は遠いのと忙しいので、食事の時間がとれず、また交替要員も無く、食事だけ本部総務係りと交替するなど、大変な苦労があった。また、事業部の担当者は、一部食事の連絡が上手く伝わらず、食事抜きというボランティアもいた。

当日、所属クラブの試合等で急に欠席した者もあって、急遽、それを補うべく補充した学生もあり、人数掌握には常に苦労の連続であった。

なお、夜の会場見回りのために、学生ボランティア3人（浅井学園大生）が、実行委員と共に会場に残った。

2-2. 「大麻市民夏祭り」第2日目 8月5日(日)

(1)各係りの作業

2日目も素晴らしい天候に恵まれた。学生ボランティアは10:00集合で、前日の持ち場を再確認しながら作業に当たっていた。

この日、新たに軽スポーツ担当の学生ボランティア5名が、スポーツ全種目の競技補助要員として活躍していた。

心配されたゴミ箱と処理の作業も、駐車場の安全誘導も無事スムーズに進んだ。

(2)全員作業～会場・あと片付け

最終の「花火」「抽選会」と続いて、21時30分頃の最終プログラムが終わると、すぐ会場片付けが行われた。最終会場に残って片付け作業をした学生ボランティアは58名であった。

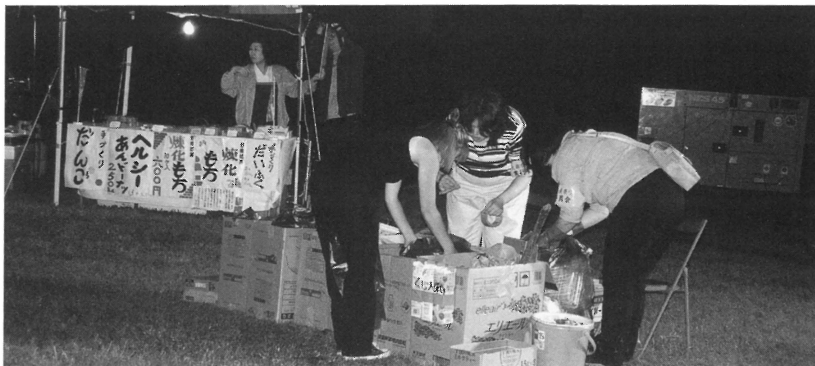
- ① テント類の解体と整理
- ② 机・椅子等の返却
- ③ 使用した用具類の収集と返却
- ④ 会場内のゴミの一切の収集と処分
- ⑤ 会場全体の清掃
- ⑥ その他

全員で一生懸命に作業をしたので、後片付けはわずか40分程で完了した。ここでは、学生ボランティアの働きが特に大きかった。

これらの作業を終えて、実行委員長からお礼の言葉と一人一人へ記念品（図書券）が贈られて解散となったのは22:00を過ぎていた。

結局、この2日間での学生ボランティア活動参加者の実数は92名であった。必要によっては、当日祭りに来場した学生もすぐその場で作業に加わってもらった者もいた。

写真2 夜遅くまでゴミ分別をする学生ボランティア



V 地域の人たちから見た学生ボランティア

実際に「祭り」の場での「学生ボランティア」を、地域の人たちはどう受けとめているのかを知るためにインタビューやアンケートを行い、下記のような回答を得た。

1. 実行委員のアンケート結果

今回の大麻夏祭り実行委員から、最終委員会と反省会席上で「学生ボランティアについて」のアンケート調査を行った。

(1)夏祭りにおける「学生ボランティア」について

この質問に対し「大変必要である」及び「あった方が良い」を加えると、実に100%であった。地域の人たちにとっては学生ボランティアは、「絶対必要」と考えていることがわかる。また「学生ボランティア抜きでは、祭りの成功は考えられない」という意見まであり、そのことから学生がいかに期待されているかがわかる。

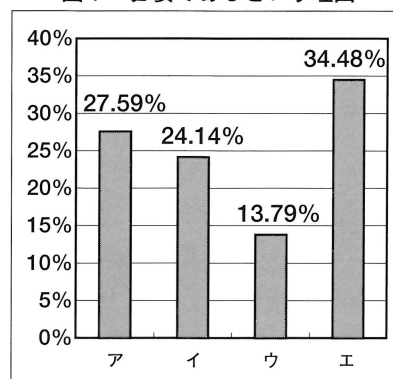
(2)「必要である」という理由について

ア 役員数が不足している	27.59%
イ 地域に若者がいない	24.14%
ウ 仕事を頼みやすい	13.79%
エ 世代間の交流が図られる	34.48%
オ その他	0%

この統計から、実行委員の間では、仕事を通じながら「世代間の交流」が図られたことを示しており、更に会場の各所でそうした場面が展開されていたことは「学生ボランティア」の果たしていた大きな働きといえよう。

また「仕事を頼みやすい」という回答の中には、学生との係わりで、気軽に声をかけあい交流が出来ていた表れと見ることができる。

図1 必要であるという理由



(3)「仕事への期待に」について

「会場作成や片付け」「会場のゴミ処理や整理」「駐車場の整理」という、裏方で人数を必要とするものについては、従来どおりに「学生ボランティア」の最も大きな仕事として期待されている。その上で更に「ステージでの司会」「スポーツ関係の進行や審判」「老人介護や会場案内」等にも学生が適当であるという意見が多かった。

(4)これからのお祭りと学生の関係について

「学生は動きやすいようにもっと積極的に計画段階から参加させるべきである」49%と「地域と学生がグループを作り、共同で計画・実行・評価まですべきである」42%を含めると、91%の委員が「計画段階から共同で行う」ことを希望していることがわかった。

「部分的に手伝いをさせれば良い」という消極的な意見は1割にも満たなかった。このことから今後の祭りを運営していく上で、地域の期待が学生を祭りの中心ととらえる方向に大きく変化してきていることに注目する必要がある。(図3)

2. アンケート調査自由記載とインタビューから

アンケート調査での自由記載されたものと、会場でのインタビューしたものをまとめたものを下記に集約した。

1 アンケート自由記載から

- ① 大麻は高齢化が進んで、企画するのは老人となるため、若者の協力が必要である。したがって企画の段階から中に入ってやってもらいたい。
- ② テレビ等で見かける現代風の若者のイメージと違い、みんなさわやかな人たちで大変良かったです。ボランティアの募集、組織化、仕事内容の把握でリーダーの人は苦心・努力されたと思う。今年は、役員自体が初仕事だったので、全体像を描けなかった反省があります。来年もよろしく。
- ③ 「今の若い者は……」という言葉がよく用いられますが、そういう懸念は全く感じられず、実に誠実に真し協力してくれたと思う。今後、地域役員と学生が一体感が持てるように工夫したい。
- ③ それぞれが自分に責任を持って行動しており、とても頼もしく思え、心強く感じた。地域と一体感を持てればと思っており、これからはわれわれも学生の中に入って行くようにしたい。
- ④ 役員は年齢が高齢であり動きが鈍い。学生はどんな仕事でもできる柔軟性がある。
- ⑤ 全体の実行委員会からの情報が十分でなかった中で、大変協力的に参加していただいたことを感謝しています。
- ⑥ 学生さんの活躍なしでは出来ない事業であり、これからもご協力をお願いします。今年は本当にご苦勞様でした。(同種の意見多数)
- ⑦ 地域との交流を深めるためにも、お祭りばかりではなく、色々な行事で交流を図りたい。

2 一般参加者へのインタビューから

- ① 学生のボランティア……？結構なことではないですか。会場に若者が多いとそれ

だけ活気が出てくるし、見ていても楽しく感じますよ。(40代・男)

② ごみ整理をしている学生さんを見て、今時の若い人たちとしては関心しました。

捨てる私たちも、きちんと分別して投げましたが、教えられました。(50代・女)

③ 学生さんだと、何でも聞きやすいし、話しやすいのでいいですね。やはり若者がいるということは、全体に活気が感じられますね。わたしら年寄りばかりではこうはいきませんからね(70代・女)

④ ゴミの投げ方(分別)を教えてくれた。うまくなげてよかった。(小学生・男)

⑤ 駐車場の車の出し入れに誘導があつて助かったよ。あれボランティアの学生さん? 知らなかった。混んでも安心出来るから、いいですよ。(30代・男)

以上のような声からも、学生ボランティアに対し多くの方々が必要を認め、また諸手をあげて受け入れてくれていることがわかる。このように、地域の人たちにとっては「この祭りには学生ボランティアが絶対に必要である」ということが明らかであり、地域住民は若い力を必要としているのである。

VI 「学生ボランティア」を終えての意見と考察

前項では実行委員からの反省や一般市民の意見等を述べたが、当の学生はどう考えているのかをアンケート調査の中からまとめてみたい。

1. 学生のアンケート調査から

(1)学生ボランティアについてどう思うか

「大変必要である」「必要である」を加えると、実に100%全員が「必要」を感じているのがわかった。これは、祭りが終了した直後に得たの感想である。この質問に対する結果は実行委員と全く同じであった。学生自身も祭りの中で、自らの位置付けを感じたからであると考えられる。

(2)ボランティア活動を体験してどう思ったか

「意義があった」41% 「良かった」53% 「どちらでもない」6%であった。この結果から大半の学生はボランティアの意義を感じていたものと思われる。

写真3 「よさこいソーラン」を踊る学生ボランティア(北海道浅井学園大学学生)

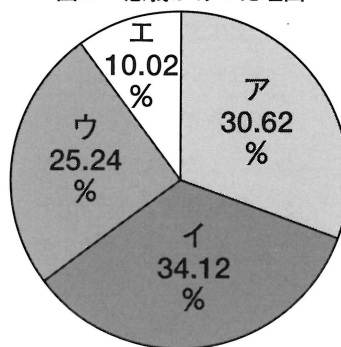


(3)意義があった理由について

次にボランティアとしての「意義があった」「良かった」と答えた学生にその理由を尋ねた。

ア	達成感があった	30.62%
イ	皆で協力できたから	34.12%
ウ	やって楽しい	25.24%
エ	世代間交流が図られた	10.02%
オ	その他	0%

図2 意義があった理由



この結果から、学生は社会参加による充実感や達成感、或いは共に協力して仕事をすすめることに意義を感じているのが伺える。

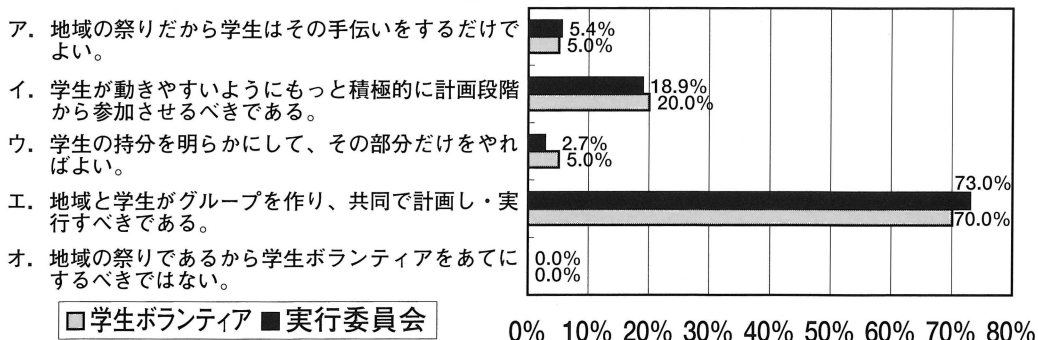
そしてその結果は、実行委員が世代間交流を第1義にあげているのとは少し違っているの、そこに若者と地域の人々との感じ方の若干の相違が見られるところである。

(4)これからからの祭りとの関わりについて

「学生が動きやすいように、もっと積極的に計画段階から参加させるべきである」と「地域と学生がグループを作り、共同で計画し・実行すべきである」を加えると90%の意見となるが、ここも実行委員の回答と全く共通することがわかった。(図3)

また、学生の方は、実行委員会に対し「一緒に活動できて良かった」という感謝の気持ちが多くみられたが、これはやはり共同の基盤のうえに立って、共に汗を流した仲間という共通の認識があったからであろう。そこに学生としての大きな意義があったと考える。

図3 これからの祭りとの関係 (複数回答)



Ⅶ 「大麻夏祭り」の学生ボランティアの課題

1. 「学生ボランティア」として行う作業内容を十分検討し、効率の良い取り組みや作業配置

を研究する必要がある。

- ① 係りによっては終日必要なものと、会場作りのように、最初だけの仕事や、部分的な仕事等があり、もっと綿密な計画を立てて配置をすること。
- ② 外部との係わりのあるものは、事前に十分な打合せのもとに、本当に必要な最低限の数の「学生ボランティア」とすべきである。
- ③ 「祭り」全体をみて、どうしても「学生ボランティア」でなければ出来ないものを明らかにし、そこに集中させること。
- ④ 遠方から来ている女子学生の帰宅時間を配慮すること。夜8時以降は避けるべきである。

2. 地域に住む若者や学生の出番を検討し、地域ぐるみの「祭り」への方向を志向していく必要がある。

- ① 日頃から地域の若者の出番を作り、地域全体に若者の位置付けをする中から、祭りの中にも活躍して貰う。
- ② 地域に居る学生も「ボランティア」として参加できるよう体制を作る。今回の高校生のボランティアは中学生の時からこの祭りに参加していたモデルケースである。
- ③ 祭りの日に、他市町村から大麻へ帰ってきた学生の活動の場も検討すべきである。今回の祭りの「市民ステージ」では、そうした学生の出演（写真4）があった。地域の若者として、それぞれの地域から推薦を受ければ、相当なものとなるはずである。

写真4 夏休みで帰省し「市民ステージ」で歌う「学生ボランティア」



3. この「祭り」で、今後の進め方に伴い、それに対し「学生ボランティア」のあり方を考え「大学としてどう取り組むか」という対応が必要がある。

- ① 単なる手伝いや補助で無く、この活動が「学習の場でもある。」という、地域参加プログラムとなるような、位置付けをすることをする。
- ② 大学が「地域とつながる」という視点から、こうした地域のコミュニティを高めるよう

な行事に積極的に係わっていくこと。

- ③ 学生が行う「清風祭（学園祭）」への地域の人たちを迎えることと、地域のお祭りへ学生が参加することにより、地域との相互の交流の活発化を図ること。

4. 学生がもっと主体的にかかわっていくことのできる「祭り」であるよう、相互の研究が必要である。（提案～「大麻市民夏祭りを考える研究会」の発足）。地域に生きる「学生ボランティア」を目指すべきであり、それが、「祭り」の将来を支える大きな力になるはずである。

5. 「学生ボランティア」として、今後も続けて行くことが必要とするなら、大学当局とも更に連携を深め、学生がもっと出やすいように進める必要がある。

いつまでも、学生の「善意」だけにたよっても、年によって全くボランティアが集まらないという状態になったり、この活動が途切れてしまわないよう、配慮する必要がある。

VIII おわりに

地域の活性化を図るということは、さまざまな分野からの広い取り組みがなされなければならない。ここでは、「学生ボランティア」を通じた取り組みをとりあげたのは、今日、もっとも関心の深い「若さ」への挑戦としての一つの方法としてである。

・特にそれは、地域を構成している全ての人々が、生き生きとして活動をすすめていくことにあると考えている。

地域の人々は「学生ボランティア」を迎え、こうした祭りや交流を通じて学生のもつ「若さ」を得て活気ある町づくりにつながっている。また、学生も期待され社会的体験を積む中から青年のアイデンティティを獲得してゆくことが大きな意義であるといえる。

今後は、いっそう「生涯学習」を進め、人々のつながりを深め、よりよい活動が展開されて行くことを期待するところである。

この「大麻市民夏祭り」における実践も、そうした活力に満ちた生き甲斐のある地域を作る一つの事例としての試みであり、今後の発展に大いなる期待を寄せるものである。

IX 引用・参考文献

- 1) 北海道浅井学園生涯学習システム学部学生便覧 2001年
- 2) 学習ボランティア活動 稲生脛吾 実務出版 1992年
- 3) ボランティアへの招待 岩波書店編 岩波書店 1991年